

論文審査の結果の要旨

氏名：中 島 英

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：精神疾患における睡眠状態と抑うつ症状との関連

審査委員：（主 査） 教授 岩 崎 賢 一

（副 査） 教授 中 嶋 秀 人 教授 日 臺 智 明

教授 兼 板 佳 孝

抑うつ症状は、うつ病や双極性障害などの気分障害のみならず、統合失調症や不安障害などにおいても認められる。うつ病においては、不眠と抑うつ症状との間に密接な関連があることが明らかにされており、他の精神疾患においても、不眠が抑うつ症状に関連していることが推測されるが、この点を明らかにした研究はない。そこで、本研究において申請者は、不眠と抑うつ症状との関連が、うつ病以外の精神疾患においてもみられるという仮説を立て、うつ病、統合失調症、双極性障害、不安障害を対象に、睡眠の状態と抑うつ症状の程度が関連するか検討した。また、統合失調症と不安障害については、抑うつ症状が疾患特異的症状に関連するかも検討した。

「睡眠脳波を用いたうつ病の客観的評価法の実用化に関する研究～SEEDs Study 2～」で収集された185名の患者データに対し、うつ病患者71名、統合失調症患者25名、双極性障害患者22名、不安障害患者29名の計147名のデータをオプトアウト形式により二次利用した。睡眠状態は、アテネ不眠尺度および携帯型脳波計で取得された睡眠脳波で評価した。主観的抑うつ症状はベック抑うつ尺度で、客観的抑うつ症状はハミルトンうつ病評価尺度で評価した。統合失調症と不安障害については、それぞれ陽性・陰性症状評価尺度、状態—特性不安尺度で評価された重症度と主観的・客観的抑うつ症状との関連を検討した。

その結果、4疾患すべてにおいて、自覚的不眠を有する患者は、主観的抑うつ症状が強いことを捉えた。また、統合失調症においては、睡眠脳波で定義した不眠を有する患者は、主観的抑うつ症状が強いことを認めた。統合失調症および不安障害においては、主観的抑うつ症状の重症度が特異的な症状の重症度に関連することを見出した。

このように本研究は、精神医学領域における新知見を明らかにした意義があり、そして、睡眠状態の改善への積極的な介入が各疾患の抑うつ症状の改善に効果がある可能性も示唆し臨床的にも意義がある。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

令和 4年 2月 24日